

8カンテレ

CSR  
REPORT  
2018 

関西テレビ放送 CSR報告書2018

## 目次

- 1 CSR活動の基本方針／CSR活動3つの柱
- 2 編集方針
- 3 「心でつながるプロジェクト」
- 4 「ごあいさつ」代表取締役社長 福井澄郎

### 第1章 ● 地域への貢献活動

- 6 地域との信頼関係づくりこそ関西テレビの番組づくりの出発点
- 8 「命と暮らしを守る」情報を発信
- 9 人と地域を愛す
- 10 スポーツの感動を共に
- 11 視聴者と考える
- 12 地域の人々と作り上げる

### 第2章 ● 子どもたちの未来のために

- 14 「カンテレへの期待」大阪市北区長 上野信子氏、児童虐待防止協会理事長 津崎哲郎氏
- 16 「虐待ホットライン」をサポート
- 17 里親制度の啓発／親子のための『たまご&ひよこDAY』
- 18 「人権・震災・コミュニケーション」—多彩な授業を展開
- 19 親子でテレビを体験
- 20 貧困・飢餓・児童労働—子どもたちの命を見つめて／チームワークを学ぶ

### 第3章 ● 人権を守る

- 22 「発足10年に思うこと」オンブズ・カンテレ委員会委員長 藏本一也
- 23 独立した立場から—オンブズ・カンテレ委員会
- 24 人権とは相手の立場で考えること—
- 25 マイノリティに光を当てること—ドラマ『FINAL CUT』の放送を終えて
- 26 進化するリアルタイム字幕

### 第4章 ● 番組を守る

- 28 「分別をもった情報を」関西テレビ番組審議会委員長 上村洋行
- 29 視聴者の利益を守るため—番組とCMをチェック／視聴者の声を社内でも共有
- 30 自己検証番組「カンテレ通信」／「感謝をこめて」CSR担当 専務取締役 宮川慶一
- 31 会社概要／関係会社／カンテレ視聴可能エリア
- 32 持続可能な開発目標(SDGs)

## CSR活動の基本方針

関西テレビは子どもたちの健やかな成長を応援するため、ニュース番組を通じて児童虐待防止キャンペーンを展開すると共に、「児童虐待防止協会」の設立に協力し、現在も支援を続けているほか、ユニセフと協力して世界の子どもたちを支援する「FNSチャリティキャンペーン」の実施や、キャンプ体験を通じて青少年の健全育成を目指す「関西テレビ青少年育成事業団」の設立など、さまざまな社会貢献活動を行ってきました。

しかし、2007年に番組捏造問題をひき起こし、これを機に私たちは「関西テレビ倫理・行動憲章」を定めました。憲章では「公共の福祉と文化の向上、社会正義の実現を通じて健全な民主主義の発展に寄与する」と再確認しました。

さらに「放送の公共的使命を深く自覚し、国民の知る権利に奉仕するため、また視聴者の楽しみと満足のために、報道・表現の自由を行使する事」「人間の尊厳に敬意を払い差別を行わず人権を守る事」を誓いました。これに則って地域情報・災害情報・エンターテインメント番組を日々エリアの人達に届けています。

同時に私たちは、「企業市民としての社会的責任として放送・イベントなど事業を通じて社会全般に対する貢献活動を行い、社会問題の解決に自発的に取り組む」と約束しました。その実践として社内横断の「心でつながるプロジェクト」を立ち上げ、視聴者との相互理解を通してメディアリテラシー向上や地域貢献活動に努めてきました。

その歴史的経緯を踏まえ、CSRの活動方針を以下の3つとします。

## CSR活動3つの柱

- 1 地域への貢献活動**

地域に愛されるテレビ局として地域の情報を発信し、文化や歴史を守り、環境を大切にして、地域と地域、人と人をつなぎます。
- 2 子どもたちの未来のために**

子どもは未来そのものです。子どもたちを社会全体で見守り、次の時代を担う世代として大切に育てる。そんな活動をサポートしていきます。
- 3 人権を守る**

基本的人権を守るために報道・言論の自由が付託されていることを自覚し、社会的弱者に寄り添い、誰もが幸せに生きやすい社会をめざします。

※2007年1月7日に放送された「発掘! あるある大事典II」で番組内容のデータやコメントが捏造された問題

## 編集方針

私たちテレビ局の役割は、国内外の最新情報や日々の暮らしに役立つ生活情報、笑いや楽しみ・感動を視聴者に届ける事です。番組を通じて“人と人をつなぐ”“地域と地域をつなぐ”役割も果たしたいと考えています。

この報告書は、関西テレビが2017年度に行ったCSR推進活動をまとめたものです。CSRという言葉は一般的に「企業の社会的責任」と訳されますが、テレビ局らしいCSR活動や社会貢献の在り方は時代と共に変化しています。関西テレビもCSRを推進する専門部局を発足させて5年が過ぎ、この機会にCSR活動の中心となる3つの柱「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」を定めました。

本報告書の構成は、この3つの柱に「番組を守る」を加えた4つの章から成っています。また、それぞれの活動に2015年の国連サミットで採択された『持続可能な開発目標<sup>\*</sup>(Sustainable Development Goals = SDGs)』のアイコンをつけています。

※詳細はP32をご覧ください。

関西テレビのCSR活動の中心は、各部局の社員がメンバーとなる「心でつながるプロジェクト(以下、心PJ)」です。その名の通り視聴者と「心でつながる」ことを目的に活動を提案し自ら行動するボトムアップ型のプロジェクトです。原則2年で交代し全社員が参加することが目標です。

2017年度は7月にメンバーの半分が入れ替わったこともあり、最初に新メンバーで『発掘! あるある大事典II』問題の反省が心PJ発足の原点であることを共有しました。そしてアナウンサー朗読会(P11参照)・出前授業(P18参照)・オープンスクール(P19参照)・FNSチャリティ(P20参照)・カンテレ通信(P30参照)など、これまで行われてきた視聴者とつながる活動について説明が行われました。

### CSR活動を担う社内横断組織

## 「心でつながるプロジェクト」

新メンバーの最初の活動は、社屋を開放して行われるオープンスクールです。カンテレ扇町スクエア1階にあるスタジオ“なんでもアリーナ”で、1時限目「ドラマの演出」、2時限目「テレビ番組の宣伝」、3時限目「データ放送の世界」、そして「ニュース番組の制作」の4つのプログラムを企画し、親子約1千人を招待しました。実施後のアンケートでは約8割の方から「満足・やや満足」との回答をいただきました。一方で「心PJのメンバーが主体的に企画するには、6月に心PJを立ち上げているようでは準備期間が短く、8月実施は難しい」という意見もあり、今後のあり方を考えるきっかけになりました。

これを受け、9月から12月にかけて心PJではメディアリテラシーを“相互理解”と再定義し、グループに分かれて「企画のネタ出し」のワークショップを行うなど実現可能な事業を絞りこみました。そして最終的にたどり着いたのがスタジオでセットを見学しカメラ操作を体験、社員と共にメディアリテラシーを学ぶ『カンテレ社内見学』です。

2017年度はこれまでの心PJのありかたやメディアリテラシー活動を総括して、次の一步を踏み出す契機となりました。この『カンテレ社内見学』は60周年記念事業の一環として、2018年度は毎週火曜日に開催することが決まりました。



「心PJ」会議風景



オープンスクールの準備をする「心PJ」メンバー

## ごあいさつ

急激な速度でメディアの価値観が多様化し、テレビの存在感や先行きに不安な声もある一方、人と人をつなぐ「テレビ」という装置は、まだまだ大きな影響力を持ち、たくさんの可能性を秘めています。

テレビ局は視聴者ニーズに合う番組を作り続ける「コンテンツ創造企業」であり、電波を通じてそのコンテンツを視聴者に届ける「装置産業」です。

しかし、私たちが関西という地域に根ざし、信頼という絆で視聴者と深く結びつくことは簡単ではありません。

関西テレビ倫理・行動憲章には「思いやりと深い想像力を持って、社会に真に必要とされる良質なメディアを目指す」と記しています。これをふまえて番組制作では、地域との関わり方をあらためて見つめ直し、視聴者や住民を尊重する「地域密着番組」が定着しました。

また「企業市民としての社会的責任を放送・イベントなど事業を通じて社会全般に対する貢献活動を行う」ことも約束しています。メディアリテラシー推進活動としてのオープンスクールや出前授業、さらにはアナウンサー朗読会などのイベントを通して、直接視聴者や地域と触れ合う形が出来上がりました。

私たちはCSR活動の基本方針を定め、「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」を3つの柱としました。その一つ、「地域貢献」には「地域の情報を発信し、文化や歴史を守り、環境を大切にしてい地域と地域、人と人をつなぐ」という思いを込めています。

CSRの3つの柱をキーワードに、CSR活動と番組の両輪で、これからもさまざまな挑戦を社員一同で実践し、皆様と共に歩んでまいります。



関西テレビ放送株式会社  
代表取締役社長  
**福井澄郎**

## 第1章 地域への貢献活動 Contribution to the community

Chapter 1

「関西の魅力再発見」プロデューサーの地域への思い

# 地域との信頼関係づくりこそ 関西テレビの番組づくりの出発点



関西という地域をテーマにする番組は多くありますが、関西テレビが番組づくりで特に大切にしていることは地域との信頼関係です。

「関西の魅力をもっと引き出したい」と考える、情報番組・ドラマ・バラエティを担当する制作部の3人のプロデューサーが地域への思いを語ります。

関西に暮らす人々をありのままに伝えることが視聴者ニーズ

木村 ●ドラマ『大阪環状線』は環状線の駅ごとに特色があり、街角を舞台に物語を作れば「皆知っているあの駅だ」と視聴者の共感を呼び、身近に感じてくれるのではと企画が始まりました。また、大阪環状線というドラマはセットを組まず、オールロケで撮影しています。

佐野 ●情報番組『よ〜いドン!』のコーナー企画「となりの人間国宝さん」「産地の奥さんごちそう様!」「あいLOVE田舎暮らし」など、地域や人にこだわってやってきたことが結果につながりました。最初から地域の何かを伝えようと考えたのではなく、地域の人に教えられました。なかでも「人間国宝さん」は、番組開始以来10年間続いている人気コーナーです。関西という地域の魅力があり、人を探して深掘りすれば、より多くの方に見てもらえることが実証されました。

人に会いに行くと様々な人生がある。例えば、おいしい店紹介というVTRがディレクターの意図を超えて人生物語に変わることもありました。事実を聞き出しスタジオで応える、こちらが想定した作り物でなく、市井の人が一生懸命生きている姿や家族の支えをありのまま伝えることが視聴者ニーズだと教えられました。

加藤 ●バラエティ番組『ちゃちゃ入れマンデー』は関西人の好きな「トーク」と「毒」を売りにした番組です。東京で「ちゃちゃ入れ」は「ちょっかいを出す」というネガティブな意味で使われていますが、関西では「つつこみを入れる」という意味で使われています。

東京発のネット番組に対抗するために、関西の視聴者が次の日に職場や学校で「昨日ちゃちゃ入れ見た?」と会話してくれる関西の情報に特化し、足で稼ぐ番組を目指しました。関西弁や独特な文化を入り口に街頭インタビューをすると、街の人がスーパースターのようなリアクションを返してくれます。関西人の独特の対話や



木村 弥寿彦  
制作局制作部(1995年入社)報道局を経て制作部でバラエティやドラマを担当。ドラマ『その街の今は』で日本放送文化大賞準グランプリ、『大阪環状線ひと駅ごとの愛物語』で民放連盟賞優秀賞を受賞。

感性を受け止め、今の形になっていきました。

### 制作現場の コンプライアンス意識の変化が 地域との信頼関係をつくった

佐野 ●ひと昔とはがった企画で視聴率を狙っていました。今は地域に優しい番組が視聴者のニーズに思えてきました。

加藤 ●『ちゃちゃ入れマンデー』は、放送が夜7時台なのでお子さんが見えています。とがったものより、家族で見ているチャンネルを変える必要のない番組づくりを目指しています。

木村 ●車を壊すなど派手な刺激的な映像は、インターネットで見る時代になりました。

加藤 ●私たちの世代は、10年前くらいのディレクター時代に「発掘!あるある大事典II」の捏造問題を経験しました。取材に行けば「お前のところなんか協力するか」などと言われ、辛い時代でした。二度とあんなことを起こしたくない。今、プロデューサーとしてディレクターを送り出す時も「ロケで撮れなかったら撮れなくていい、嘘はつかないでいい」「現場で変化があればまず連絡して」と言い、「取材したそのままの面白さで構成しよう」と話しています。二度とあのような経験をしたくないという思いは、制作現場の共通認識です。若い世代は“あるあ



佐野 拓水  
制作局制作部(2000年入社)入社以来制作ひと筋。ドラマ、バラエティ、東京制作部を経験後、『胸いっぱいサミット!』の担当を経て『よ〜いドン!』のプロデューサー。

る”を知らない。インターネットの動画を経験して入ってくるディレクターもいる。先輩として、カンテレ流のモノ作りはこうであると伝えたいと感じています。

### 関西の魅力再発見が3人のテーマ

佐野 ●街を歩き、出会い、人の魅力を映像にします。加藤さんがいった「関西に散らばっていた話題を今どきの切り口で見せる」ことで視聴者に共感をいただいています。

加藤 ●「関西の魅力再発見」は、ここにいる3人に共通するテーマですよね。

木村 ●番組の認知度が上がるという循環が起こります。街頭へ行くとロケに協力的ですね。

佐野 ●カンテレへの地域の信頼が高まると、取材拒否という人がどんどん減っていきます。人間国宝さんも受け入れてくれ、家に上げてくれます。

加藤 ●街頭インタビューではカメラとカンテレの紙袋1つで信用して取材に応じてくれます。

佐野 ●関西人は、東京のタレントより自分が暮らす街や隣町への関心が高いですね。

加藤 ●確かに関西では自分の街がテレビで映った時のテンションは東京より高いです。

木村 ●名古屋も九州もローカル情報番組が強い。スポーツも広島・札幌・福岡等



加藤 麻衣  
制作局制作部(2001年入社)番組ADからスタートして制作一筋17年!現在は、自身で立ち上げた番組『ちゃちゃ入れマンデー』プロデューサー。

の地元愛は間違いのないと思います。

佐野 ●大きな震災に相次いで見舞われ、人々は地域や人の結びつきの大切さを実感してきていると感じます。

### 番組を通じての「地域への貢献」

木村 ●ドラマ『大阪環状線』のロケでは駅前商店街の協力が不可欠で、挨拶に行くと、例えばエキストラに協力するよと声がかかり、結果として参加していただきたりする。双方のメリットになり地域への貢献にもなります。

加藤 ●『ちゃちゃ入れマンデー』では、「平成生まれの若者がわからない関西弁ランキング」というコーナーがあり、毎回SNSでも反響があります。“年配の方にとってあたり前の関西弁を若者は知らない”という、発見と共感のムーブメントが起こっていると聞きます。東京の番組を見ていると関西弁も薄れてきています。この番組をきっかけに自分が住んでいる関西という地域の言葉や文化を知ってほしい。地域の年配の人と若者が話すきっかけになれば、間接的な地域への貢献かもしれませんし、これ以上うれしいことはありません。

佐野 ●地域の情報番組は地域の皆さんの協力で成り立っています。スタッフも失礼なことはしないし裏切らない。共に歩み、お互いを尊重する関係性が生まれて番組が成り立つのです。

## 「命と暮らしを守る」情報を発信



2017年4月に『みんなのニュース 報道ランナー』がスタートしました。番組進行の新実彰平アナウンサーは27歳、関西の夕方のニュースで最も若いメインキャスターです。視聴者の皆さまに信頼していただける暮らしの「伴走者」としてのニュース番組を目指し、地道な取材と関西ならではの視点でニュースをわかりやすくお届けしています。

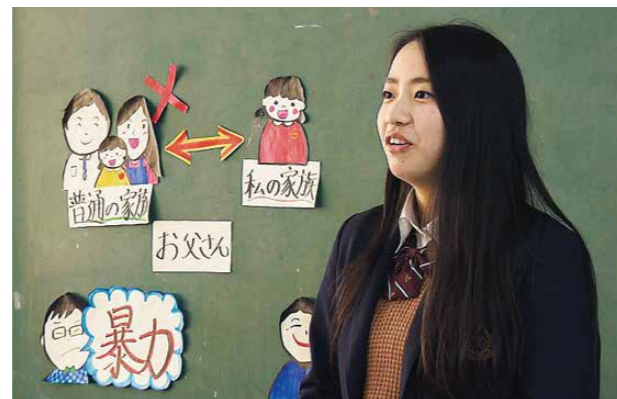
ニュースではスクープがありました。学校法人と財務省の国有地取り引きに関する問題で、交渉のやり取りを記録した音声データを入手し、当時の理財局長が国会で虚偽答弁した疑いがあることを『報道ランナー』はいち早く指摘。この問題は財務省の文書改ざんにまで発展して、今なお大きな問題となっています。



『報道ランナー』のキャスター



災害放送の訓練風景



『夢への扉「課題研究」—先生を越えて進め—』

災害時の放送の役割が増えています。2017年7月から、災害時に関西の各自治体から送られてくるLアラートと呼ばれる情報をデータ放送で表示することで、“避難勧告”などの情報をテレビ画面でお知らせすることができるようになりました。

また2017年には、政府の地震調査委員会が南海トラフ地震の今後30年間における発生の可能性を70~80%に引き上げました。関西では和歌山県や徳島県沿岸だけでなく、大阪湾にも津波が到達すると予想されています。ひとたび発生すると広域での被害が予想されることから、フジテレビ系列全体で全国規模の訓練をし、非常時の災害放送の手順を確認しています。さらに、外国からのミサイル発射の情報もいち早く視聴者に伝えられるように備えています。

ドキュメンタリー部門では『夢への扉「課題研究」—先生を越えて進め—』が日本民間放送連盟賞テレビ教養部門の優秀賞を受賞しました。

また報道局のカメラマンが日本映画テレビ技術協会の「柴田賞」を受賞、在阪民放局のカメラマンで柴田賞を受賞するのは初めてです。

報道機関として関西のエリアの住民の“命と暮らしを守る”情報を発信していきます。

## 人と地域を愛す

カンテレ平日あさの顔といえば、『よ〜いドン!』。2008年6月にスタートして丸10年です。さまざまな名物コーナーは、出演者やスタッフが出会った素敵な人々に支えられています。中でも「となりの人間国宝さん」は関西を中心に散策し、街中での個性豊かな人との出会いが魅力になっています。この10年間で4千3百人以上を“人間国宝さん”に認定。人と地域を愛してこだわる関西からの発信だからこそ成立する番組なのかもしれません。

バラエティといえば、東京キー局発信の番組が多いゴールデン帯の激戦区で、関西テレビ制作の番組で対抗している火



『大阪環状線 -Part3- ひと駅ごとのスマイル』



『よ〜いドン!』



『ちゃちゃ入れマンデー』

曜の『ちゃちゃ入れマンデー』と金曜の『快傑えみちゃんねる』です。関西の文化が濃縮されたトークで視聴者からの高い支持が続いています。『ちゃちゃ入れマンデー』では言葉・文化・食などを切り口に関西という地域の魅力を再発見します。

ドラマ『大阪環状線』は、大阪環状線の駅を舞台に制作し、シリーズ化して放送。2017年度でシリーズ第3弾となりました。大阪環状線の各駅を舞台にした一話完結のオムニバスドラマが10作品。「ひと駅ごとのスマイル」と題して、“大笑い”から“泣き笑い”まで恋愛・友情・家族愛などさまざまな人間ドラマを作品に込めています。駅前の飲食店や住宅街などでみなさんの協力を得ながらロケを行い、魅力溢れるキャストがそれぞれのスマイルを届けました。

週末の土曜・日曜には『ウラマヨ!』『マルコポロリ!』等、長寿番組が軒を連ねています。『ウラマヨ!』には関西の企業の社長から経営の苦労話・裏話を聞く名物コーナーがあります。子どもの制服のリサイクルで起業した苦労話や老舗のお惣菜開発の裏話など、生活に密着したビジネスモデルが紹介されます。これからも関西エリアの魅力を発信し、地域と人をつなぎます。

## スポーツの感動を共に



国内外の女性トップランナーが競う『第37回 大阪国際女子マラソン』は、今回は2020年に開催される東京オリンピックの代表を決めるMGC(マラソングランドチャンピオンシップ)への出場権を懸けて開催されました。レースは初マラソンの松田瑞生選手が力強い走りを見せ、2時間22分44秒の好タイムで優勝。ニューヒロインの鮮烈デビューを大阪から全国に伝えることができました。

関西テレビはスポーツ競技の中継などスポーツ番組を数多く制作していますが、同時に大会運営にも関わっています。大阪国際女子マラソンは日本における女子マラソンの



松田瑞生選手が優勝



高校陸上部や市民がサポート



優勝した片岡大育選手

草分け的な大会として、また、1月の風物詩としてすっかり浪速の街に定着し、競技関係者だけでなく協賛社や地元のボランティアに支えられて現在まで継続されてきました。同時開催のハーフマラソンの参加者や長居公園を含む沿道の応援など、今年は37万人以上の市民がこのイベントを楽しみ、子どもたちがスポーツに取り組むきっかけにもなりました。地域の理解こそがイベント継続の鍵です。

ゴルフでは、アジアナンバーワンを決める『アジアパシフィックオープンゴルフ チャンピオンシップ ダイヤモンドカップゴルフ2017』が千葉県の名門カレドニアン・ゴルフクラブで行われました。国内外のトッププロが集結する中、片岡大育選手が見事逆転優勝。アジアナンバーワン決定試合としてふさわしい激戦をお届けしました。49回の歴史をもつゴルフトーナメント運営にも、開催地域の自治体の理解やボランティアの存在が不可欠で、関西テレビは放送だけでなく運営面でもサポートしました。

スポーツ中継だけでなく新番組『コヤぶるッ! SPORTS』では小藪千豊さんをMCに、本田望結さんをアシスタントに迎え、阪神タイガースを始め様々なスポーツの話題を取り上げ、関西らしい切り口で放送しています。

## 視聴者と考える



### カンテレアナウンサー朗読会 Vol.16 『おしゃべりな贈りもの』

9月17日、カンテレ扇町スクエアのスタジオ“なんでもアリーナ”で『カンテレアナウンサー朗読会』が開かれました。2017年のテーマは「感謝」。詩の朗読から始まりアメリカの児童文学や創作落語まで、アナウンサーが日頃テレビで見せることないパフォーマンスを披露。この日は台風による暴風雨警報が発令され、開催は午前の部だけとなりましたが、悪天候の中来場された人や、午後の部がないと知って「来年また来る」と帰られた人など、さまざまな人に支えられた「感謝」のイベントとなりました。

朗読会の最後にはアナウンサーがFNSチャリティキャンペーンへの募金を呼びかけました。



カンテレアナウンサーの熱演

### 京都大学iPS細胞研究基金講演会 『山中伸弥教授に聞く、ヒトiPS細胞研究の10年』

10月14日、“なんでもアリーナ”で関西テレビと京都大学iPS細胞研究所の共催によるノーベル賞受賞者山中伸弥教授の講演会を開催。患者や支援者だけでなく、関西テレビのホームページを通じて初めてiPS細胞に興味を持った人などおよそ300人が来場しました。講演会では、山中教授はヒトiPS細胞の発見の裏で資金集めに苦労したことや、論文発表で海外の研究所に紙一重で競り勝ったことを振り返ると共に、難病患者に対する思いや若き研究所スタッフの待遇改善への責任感を熱く語りました。



山中伸弥教授

### 『第37回「地方の時代」映像祭2017』 (11月11日～17日 関西大学)

「地方の時代」映像祭は、日本放送協会・日本民間放送連盟・日本ケーブルテレビ連盟・吹田市・関西大学で組織する実行委員会が主催する、地方の文化や課題をテーマにしたドキュメンタリーの発表の場で、関西テレビも運営に協力してきました。

2017年度は、放送局・学生・市民らが制作した作品287作品が寄せられ、信越放送制作『かあちゃんのごはん』がグランプリを受賞しました。映像祭の市村元事務局長は、映像祭の役割は「地域」と「小さな民」からの粘り強い発信」と「地域にこだわる作り手の交流」と話します。関西テレビは開催地の地元放送局として「地方の時代」映像祭を今後も支えていきます。



「地方の時代」映像祭2017 贈賞式

## 地域の人々と作り上げる



展示会や演劇、大型ミュージカルからクラシックコンサート、伝統芸能までさまざまなエンターテインメントを通じて、芸術・音楽・文化を体験的に楽しむ場を地域の人々に届けています。

### 半世紀にわたり市民と作りあげてきた音楽イベント

2017年度で57回目の開催となった日本有数のロングランイベント『3000人の吹奏楽』は京セラドーム大阪で開かれ、関西一円の小学生から大学生の仲間たちが集って、今回も大迫力のマーチングを披露しました。フィナーレでは一般参加



『3000人の吹奏楽』(6月24日)

者も加わって、タイトルを超える4千人の吹奏楽となりました。このイベントの売上金の一部はFNSチャリティキャンペーンを通じて日本ユニセフ協会に寄付されています。

### 大阪が誇る伝統芸能「文楽」の魅力を民放3局で広げる

2015年のスタート以来4回目の開催となる『うめだ文楽』は、グランフロント大阪のナレッジシアターで開催され、若手技芸員たちがフレッシュな演目を披露しました。民放3局と



『うめだ文楽』(2018年2月2日~4日)

ナレッジキャピタルが共催し、トークショーや解説を入れた演出は、初心者でも気軽に文楽を体験し魅力を知るきっかけとなったほか、ゲストのNAOTO(バイオリニスト・作編曲家)さんが三味線に挑戦、軽快なバイオリンに合わせて文楽人形を遣うと、普段は見ることのないシーンに客席もおおいに盛り上がりました。

## 落雷で停波! 「可搬型非常用UHFアンテナ」を石川県へ

2018年1月10日、石川テレビの送信鉄塔に大規模な落雷が発生し、鉄塔内部にある送信アンテナや放送用ケーブル等の放送設備が焼損。石川県内で放送が中断し、既存設備では復旧は困難と判断した石川テレビから関西テレビに「可搬型非常用UHFアンテナ(以下アンテナ)」の借用依頼がありました。

依頼を受け現地に運ばれたアンテナは、鎮火を待って地上130メートルの位置に設置され、放送は中断から約15時間後にほぼ

復旧しました。

このアンテナは、近年地震等の自然災害により放送設備が被災し、放送不能に陥る事態が発生していることを受け、放送を早期復旧させることを目的として、2014年に関西テレビがメーカーと共同で開発したものです。

災害時に放送設備が被災しても、地域の重要なライフラインである放送を早期復旧させるのが私たちの使命です。放送事業者として安全信頼性の向上に今後も努めていきます。



可搬式非常用UHFアンテナ

## 第2章 子どもたちの未来のために For the future of children

Chapter 2



# カンテレへの期待



子どもの人権に関わる見過ごせない社会問題のひとつ「児童虐待」について、関西テレビはその防止活動を支援してきました。「子どもの虐待を防ぐために何ができるのか」をテーマに、行政、NPOの立場からお話を聞きました。

大阪市北区 上野信子 区長  
 特定非営利活動法人 児童虐待防止協会 津崎哲郎 理事長

児童虐待の相談件数は毎年増え続けています。その原因は何でしょう？

津崎理事長 ● 2つの要素があります。1つは虐待の定義が広がり、虐待を見たら通報するということが定着した事。もう1つは虐待が生じやすい社会的背景が増えていること。貧困・都市化は家族の孤立を生み、子供を育てる能力の不十分な親や複雑な家族など、虐待を起しやすリスクのある家庭が増えた事も要因です。

上野区長 ● 北区は9割以上が共同住宅世帯ですが、近年タワーマンションと言われるような大規模マンションが次々にできるなど、地域の中で新しい住民が一気に増え、互いに顔が見える関係をつくるのが難しくなっています。また、オートロック等、建物の構造やプライバシー重視もあって近隣地域への関心も希薄になり、行政も地域も関わりにくい環境になっていることも影響していると思います。

児童虐待防止へ最前線の取り組みは？

津崎理事長 ● 虐待されている子どもの命を救う事は簡単ではありません。対応には保健所・福祉・学校・医療・警察・地域などがネットワークを作ることがポイントです。児童虐待防止協会はこのメンバーからなるケース会議に、市から委託を受けて専門職（スーパーバイザー）を派遣しています。彼らは元福祉関係の人や児童相談所のOB・OGなど経験豊富な人材で、行政職員を後押しします。

上野区長 ● 北区でも児童虐待のリスクがある児童やその家庭を支援する「要保護児童対策地域協議会」が設置されていて、サポート体制の継続のため関係機関が情報交換を行い、介入や支援方法の役割分担を決定しています。2017年度は61回行いました。この場で頼りになるのが経験と知識が豊富な専門職です。いつも

虐待防止協会のスーパーバイザーに対応策を提言していただき大変助かっています。関西テレビさんは同協会の活動を支援されているそうですね。専門職を育てるには時間がかかりますので、その支援活動を社会にもっとアピールしていただきたいです。

里親支援は社会的要請ですね？

上野区長 ● 親と暮らせない子どもたちは全国で約4万人。2017年、厚生労働省は施設養護から家庭養護（＝里親家庭）での対応に舵を切りました。里親を増やすことは社会的な要請です。私は地域に向くことが多いですが、その際、里親制度の話をするように心がけています。関西テレビさんが2017年11月に開催された里親シンポジウムのように、行政、地域、企業が連携し、何ができるか考える機会を増やすことが大切だと思います。

津崎理事長 ● 大阪市で里親の推進リーダーを8年務めた経験から、一番里親が増えた事例と教訓を話します。児童相談所が一時保護した子どもが増えて委託先に困り、苦肉の策で天理の教会に頼みに行ったことがありました。天理教の教会約50か所で一時的に保護児童を受け入れ、その後、



上野信子  
 大阪市北区長  
 神戸大学卒業、大阪市立大学大学院修了。大阪市立大学都市研究プラザ(博士研究員他)、公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構(主任研究員)など歴任、2016年4月から現職。

この委託先の半分の方が養育里親になってくれました。実際、子どもを預かると、この子たちをまた施設に返すならと、情が生まれます。

この教訓は、子どもたちと具体的な接点を広げてゆくことが大事ということです。大震災が発生した際、震災遺児への里親の申し込みが増えます。自分事に思えると人は動くのです。

関西テレビへの提言は？

津崎理事長 ● 児童虐待のような社会課



津崎哲郎  
 特定非営利活動法人児童虐待防止協会理事長  
 全国里親会役員  
 大阪市立大学卒業、1969年から大阪市中央児童相談所勤務、ケースワークに35年間従事。所長退職後、2016年から現職。

題は、メディアがとりあげ、何らかの制度が生まれることで解決へ向かいます。関西テレビは児童虐待防止活動を支援することで社会的責任を果たしています。児童虐待・里親制度は問題が山積ですが、日の当たらない社会課題を番組やCSR活動で発信してください。

上野区長 ● 映像での発信はわかりやすくインパクトがありますので、児童虐待や子どもの貧困、里親を切り口にした番組などを制作していただければ、行政も啓発に活用させていただきたいと思います。



関西テレビから

大阪市・大阪里親会と毎年秋にシンポジウムなどを開催し、啓発活動を継続しています。番組では2017年8月にドキュメンタリー『家族になる一茗荷村と夜空の君と』を放送しました。「血のつながりがなくても家族になれる」ことをテーマに里親の在り方を問う作品です。今後も里親の啓発活動で一助を担えればと考えています。



## 里親制度の啓発

親と暮らせない子どもは全国で約4万人。死別などを除いてその多くは虐待を受けて保護され、施設で暮らす子どもたちです。児童虐待のステージは「予防」「親子分離」「養育」の3段階に分かれますが、「親子分離」が行政にしかできない仕事に対し、「予防」と「養育」は心ある大人や地域が担うことができます。

2017年、国は施設養護から家庭養護へと方針を転換しました。しかし日本の里親の委託率は先進国できわめて低く、里親になる人は多くはありません。

関西テレビは大阪市、大阪市里親会と共催で、里親シンポジウム等を通じて里親制度を啓発する活動を3年間継続し、毎回数人が里親研修会のガイダンスへ踏み出します。



シンポジウム「親と暮らせない子どもたちの今」



「地域で子ども育てる」をテーマに交流

先輩里親と個別相談会

11月23日に関西テレビの“なんでもアリーナ”で開かれた第3回シンポジウムでは、第1部のゲストに迎えたシンガーソングライターの川嶋あいさんが、特別養子縁組として里親の下で暮らした思い出を語りました。生まれてすぐに両親を失い、乳児院を経て川嶋家の養女として育てられた川嶋さん、その話を偶然知った日に母親を問いただし、血の繋がりが無いことを聞かされましたが、その日も次の日も全く変わらない両親に深い愛を感じ、「自分を懸命に支えてくれる母親を見て、血のつながりはさほど重要でないのかも思えるようになった」と話しました。

第2部では関西テレビのドキュメンタリー『家族になる—茗荷村と夜空の君と』を上映。滋賀県で血のつながりを越えて共に暮らす共同体を描き、家族とは何かを問かける作品です。その後、「地域で子ども育てる」をテーマにグループディスカッションを開催、先輩里親さんを交えての交流となりました。



## 親子のための『たまご&ひよこDAY』

『たまご&ひよこDAY』は、子ども連れや妊娠中で美術館へ足を運びにくいという親子向けに美術館を貸切り、ゆっくり美術鑑賞を楽しんでいただく企画です。

2017年度は『マティスとルオー-友情50年の物語』と『生誕120年 東郷青児展 夢と現(うつつ)の女たち』の2つの展覧会を、大阪市阿倍野区のアベのハルカス美術館で実施しました。学芸員によるギャラリートークの後は、親子で自由に作品を鑑賞し、展覧会を楽しみました。



赤ちゃんと一緒に

学芸員の説明を受ける親子

## 「虐待ホットライン」をサポート



電話番号を伝えるCM

傾けます。理解したいから教えてほしいという姿勢で聞くことが大事といえます。

関西テレビは、夕方ニュースの時間帯に「♪子育て、子育て、悩みをかかえないで……」というCMを放送、2017年度は合計260回放送しました。一日平均3件、ホットラインの電話が鳴ります。

協会は電話相談だけでなく、行政への支援や保健所での講演会などを通じて、虐待問題にかかわる専門家や担い手を育てています。

子育てに悩む母親からのSOSを社会が受け止めるために、関西テレビはこれからも協会を支援していきます。

関西テレビは「児童虐待」という言葉がまだあまり知られていない1980年代から『児童虐待防止キャンペーン』に取り組んできました。1990年、児童虐待防止協会が設立され、電話相談「子どもの虐待ホットライン」がはじまりました。

2017年度、児童虐待防止協会への電話相談の件数は995件。子育てに悩む母からのSOSが主で、件数は毎年1千件~2千件で推移しています。

子育てに悩む母親たちは相談相手を求めて「子どもの虐待ホットライン」に電話をかけます。協会の相談員は電話口で、「どうしてそうしたのか?」という聞き方でなく、「あなたがそうしようと思ったわけを教えてください」と寄り添って耳を



子どもの虐待ホットライン

# 「人権・震災・コミュニケーション」 多彩な授業を展開



関西テレビの社員が講師となり、エリア各地の小・中・高校・大学でメディアリテラシーに関する授業を行う『出前授業』。2017年度は10校で実施、1350人が参加してくれました。テーマは多岐にわたりましたが、人権・震災・コミュニケーションなど、学校からの要望を受けてオリジナルな授業を考案し、それに合わせた講師を派遣しました。

## 2017年度実施校

### 5/31 滋賀県彦根市の聖泉大学 (50人)

報道センター 澤田芳博 副次長  
テーマ: テレビのニュースとは?? ~ニュースが出来るまで&難しさ、そして反省…



澤田芳博

### 6/21 尼崎市立尼崎双星高校 (200人)

編成部 東野和全 プロデューサー  
テーマ: ゼロからイチを作り、100にすること ~テレビマンのお仕事とは?~



東野和全

### 7/8 天理市男女共同参画プラザ (50人)

アナウンス部 吉原功兼  
テーマ: カンテレ・アナウンサーが語る! ~ニュース・スポーツ実況、映像コンテンツができるまで!~



吉原功兼

### 9/1 大阪市立天満中学校 (140人)

報道センター 井筒慎治 記者  
テーマ: ニュースは真実か? ~天満中学校3年生と考える



井筒慎治

### 10/6 東大阪市立枚岡中学校 (230人)

アナウンス部 豊田康雄  
テーマ: 「アナウンサーの仕事はウラマヨ!」 ~アナウンサーの仕事ののぞき見!~



豊田康雄

### 10/23 茨木市立北中学校 (130人)

制作部 脇田直樹 プロデューサー  
テーマ: 「テレビ」という仕事



脇田直樹

### 11/2 高槻市立第八中学校 (170人)

アナウンス部 岡安 譲  
テーマ: 学校では教えてくれない「伝え方のコツ」



岡安 譲

### 1/12 大阪市立大和川中学校 (200人)

報道センター 鈴木祐輔 記者  
テーマ: テレビ記者の仕事とは



鈴木祐輔

### 1/24 枚方市立楠葉中学校 (150人)

アナウンス部 関 純子  
テーマ: テレビ局のアナウンサーの仕事について



関 純子

### 2/1 高砂市立荒井小学校 (130人)

報道映像部 野上隆司 副次長  
テーマ: 震災・災害報道について考える



野上隆司

# 親子で テレビを体験



夏休みの一日、関西テレビの社屋に小学生と保護者を招いて、メディアリテラシーやテレビのしくみを楽しく理解してもらう『オープンスクール@カンテレ2017』が開かれました。

社員が準備した3つの公開授業には、事前募集で選ばれた約1千人が参加し、テレビ局の演出や技術などを学びました。またワークショップやスタジオ体験ブースを展開し、約2千2百人が来場しました。2010年のスタートから8回目、ステージでも客席でも小学生が体験できる工夫を凝らした演出を心がけています。



1時限目「ドラマの演出と撮影に挑戦しよう!」

## 2017年の公開授業の内容

### なんでもアリーナ

総司会はアナウンス部の石巻ゆうすけ・関純子が務め、出演は同志社女子大学メディア情報学科教授の影山貴彦さん、劇作家・演出家のわかぎあふさん、漫才コンビのスマイルでした。



2時限目「テレビ番組の宣伝を学ぼう!」

### 1時限目 ドラマの演出と撮影に挑戦しよう!

講師: 制作部 田中耕司、美術部 岡崎忠司  
「ドラマ」をテーマにした授業で、子どもたちがドラマの演出や演技に挑戦。

### 2時限目 テレビ番組の宣伝を学ぼう!

講師: 宣伝部 永富康太郎、アナウンス部 新実彰平  
「宣伝」をテーマにした授業で、子どもたちがカンテレを宣伝するCMを作りました。



3時限目「テレビで遊ぼう! 広がるデータ放送の世界」

### 3時限目 テレビで遊ぼう! 広がるデータ放送の世界

講師: メディア戦略部 岩田健吾  
「データ放送」をテーマにした授業で、子どもたちが未来のテレビについて考えました。



「ニュース番組を作ろう!」

## インタラクティブスペース

### ニュース番組を作ろう!

担当: アナウンス部 中島めぐみ、  
お天気キャスター 片平 敦さん、技術スタッフ

簡易の報道スタジオセットを組んで、子どもたちがカンテレスタッフと一緒にディレクター・カメラマン・キャスター役などをとつとめ、ニュース番組の制作に挑戦しました。

## 貧困・飢餓・児童労働 子どもたちの命を見つめて



FNSチャリティキャンペーンは、「世界の子どもたちの笑顔のために」をテーマに、関西テレビをはじめフジネットワーク系列28局がユニセフ(国連児童基金)とともに1974年から始めた活動です。発展途上国の子どもたちは貧困や差別、HIV／エイズなどの問題に直面しています。そんな子どもたちを助けるために関西テレビでは支援国の文化を紹介し、その国に親しみを持ってもらうイベントの開催にも取り組み、エリア・地域の皆さまから温かいご協力を頂いています。



フジテレビ内野アナウンサーによる現地取材報告会

キャンペーンポスター

2017年度の支援国は南米の「ボリビア多民族国」。6月24日には『世界を知ろう! ボリビアを知ろう!』と名付けたイベントを大阪ユニセフ協会と共催し、会場となったカンテレ扇町スクエアのインタラクティブエリアには、ボリビアのダンスや音楽があふれました。

また、2018年2月10日には、フジテレビ内野泰輔アナウンサーによる現地取材報告会を京都府庁日本館の旧議場で開催、約60人が参加しました。

募金額は関西テレビのイベント『3000人の吹奏楽』の収益の一部や、社内にある自動販売機の手数料、社員から寄せられた不要書籍等の売却益などに、一般の方からの分もあわせて356万2,480円となり、全額を日本ユニセフ協会に寄付しました。

2018年度は「ロヒンギャ難民 inバングラデシュ」の緊急支援に取り組みます。

## チームワークを学ぶ



関西テレビ青少年育成事業団は、「青少年の健全育成に貢献する」ことを目的に1978年に財団法人として設立され、2011年には公益財団法人に認定されました。事業団の運営資金は、関西テレビからの寄付金とキャンプ等の事業収入でまかなわれています。

2017年度は年間を通じて8回の野外キャンプを行い、小学生228人が参加しました。夏の「若狭マリンキャンプ」では、小学4年生から6年生合わせて30人が海洋プログラムを中心に集団生活を体験しました。参加した子どもたちから「友だちがたくさんできてうれしかった。貝をいっしょにあつめたり、カヌーやいかだ、カヤックをはじめできて楽しかった。(小3・男)」、「テントを立てたのは初めてだったので、立てたときはすごくうれしかったです。キャンプファイヤーでリーダーがおどりをしていて、とてもおもしろかったです。(小5・女)」等の感想が寄せられました。

野外炊飯やキャンプファイヤー、星座観察プログラム等を企画・運営するのは大学生のキャンプリーダーです。現在38期から41期の大学生リーダー66人が在籍しています。毎年春に、年間を通じて活動に参加でき、野外活動や社会貢献に

関心のある大学1年生を対象に募集を行い、4年間かけてリーダー養成を行います。青少年リーダーとしての知識・技術・教養を身につけさせ、キャンプ前には実技のトレーニングキャンプも実施します。

2017年度は野外活動センターなどでの実地研修を7回、事前学習会等15回、合わせて22回のリーダー養成研修を実施。夏キャンプに向けての実地研修では1年生リーダーがロープワークや火の起こし方の説明を先輩から受けた後、実際に火を起こしてカレー作りなどを練習しました。

組織のチームワークを学び、社会で活躍するリーダーのOBは40年で562人に達します。関西テレビは次の時代を担う世代を育てる活動をサポートしていきます。



いかだ体験を楽しむ小学生



キャンプの訓練をする大学生リーダー

## 第3章 人権を守る Protect human rights

Chapter 3

## 発足10年に思うこと

オンブズ・カンテレ委員会は2009年7月に発足しました。「あるある大事典」問題発生後、旧関西テレビ活性化委員会の後を受けて、オンブズ機能を重視し機動力を高めることを目指し、3名の委員で構成されています。旧委員会から「オンブズ機能」「内部的自由の保障について」「特選について」の3つの活動を引き継いでいます。

委員会発足10年が経過しました。この間、視聴者情報を重視し、改善すべき事項を明確に著実に改善されている姿勢は大いに評価できます。しかし、全国でいろいろな自然災害が発生し、報道に関してコンプライアンス上の大きな問題が発生したことは、協力会社を含めた意識改革の困難さを再認識させました。

働きかた改革が望まれています。365日24時間稼働している事業実態は周知の事実であります。社員の皆様の自覚によるだけでなく制度の改善などが必要です。公益通報制度の有効活用やリスクマネジメント委員会の活動に期待します。

番組制作や事業イベントについて、この10年間の取り組みは大いに評価できると判断します。視聴率の取れる番組制作や全社あげてのイベント実施は関西テレビの評価向上につながりました。

全般的なCSR活動について、コンテンツの制作を通じて「メディアリテラシー推進」「CSR推進」に取り組み一定の評価を得られていますが、世間では「トリプルボトムライン」を意識した活動から、ISO26000に準拠した7つの中核課題（組織統治・人権・労働慣行・環境・公正な事業慣行・消費者課題・コミュニティへの参画）を基本とした活動に移行しています。今後、国際的な基準を意識した活動をされることを期待しています。

会社を取り巻く環境は激化しています。「あるある大事典」問題発生後、約30%の社員が入れ替わっているとお聞きしました。あの問題を風化させることなく、後世に受け継ぎ、会社の重大な危機に直面し、全社員が一丸となって会社のレピュレーション回復に努めた情熱を常に持って、今後も発展されることを期待しています。



オンブズ・カンテレ委員会  
委員長 藏本一也

(くらもと かずや=同志社大学大学院ビジネス研究科長 教授)

独立した立場から――

## オンブズ・カンテレ委員会



オンブズ・カンテレ委員会は、『発掘! あるある大事典II』の捏造問題を受けて2007年に設立された「関西テレビ活性化委員会」を引継ぐ形で、2009年に設立されました。委員会の活動内容は以下の通りです。

### 1. オンブズマン機能

視聴者の人権侵害等に関する訴えや、社内の放送倫理会議で扱われた内容などについて、独立した立場で調査・検討をし、関西テレビに改善策を求めます。

### 2. 内部的自由(制作者の良心の確立)の保証

番組制作に携わる者が、放送基準に沿わない業務や良心に反する業務を命じられた場合などに、事実関係を調査し、注意喚起・改善などを求めます。

### 3. オンブズ・カンテレ特選賞

委員会として良質な番組やイベント・取り組み等を推奨するため、視聴率などとは違った視点から表彰します。

## 2017年度 委員会で審議された主な内容

### 第33回(7月28日)

【議案】「発掘! あるある大事典II」問題発生から丸10年に際して

【報告】BPO放送倫理・番組向上機構の濱田純一理事長の講演会を9月に開催予定

【委員】「10年前にこういう問題が発生したということを若い人たちにも語り継いでもらい、風化させないように取り組みを継続してやっていただきたい」

### 第34回(10月27日)

【議案】「危機管理マニュアル」の改訂について

【報告】「危機管理マニュアル」を3年ぶりに改訂

【委員】「リスク発生時に、事務局をどこが務めるのか、危機

レベルを判断するリーダーを誰が務めるのか、連絡指揮系統などを明確にしておいた方がいい」

### 第35回(1月29日)

【議案】事例集「愛する大切な番組を守るために」改訂について

【報告】番組制作上で気をつけるべき事例集「愛する大切な番組を守るために」を3年ぶりに改訂。制作の会議や各番組会議で担当者が注意すべき点を説明

【委員】「具体的な事例が載っており注意すべきポイントがわかりやすい。社員の入れ替わりによって当然知っているべきことが伝承されていないこともあるので、こうした事例集を役立ててほしい」

## オンブズ・カンテレ委員会 特選賞2017の決定

「オンブズ・カンテレ特選賞」は、社員に対して応募(自薦・他薦問わず)を呼びかけ、社員による第1次投票を経て、上位作品をオンブズ・カンテレ委員会の委員が審査し、決定します。

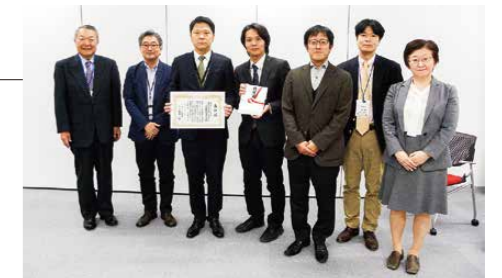
### 2017年度の特選賞

#### 番組・DVD部門

『報道ランナー』における森友問題音声データスクープ(8月シリーズで放送)

#### イベント・映画・その他活動部門

『CRISIS 公安機動捜査隊特捜班』MIPTV2017におけるアジア・ワールド・プレミア・スクリーニング上映(2017年4月3日~4日)



番組・DVD部門受賞者



イベント・映画・その他活動部門受賞者

## 人権とは相手の立場で考えること——

『家族になる—<sup>みょうがむら</sup>茗荷村と夜空の君と』を制作した  
宮田輝美ディレクターに聞く

報道現場では、人と出会い、撮影し、放送します。取材・放送をする際、人権という点で一番大事にしていることを、ドキュメンタリーを通して人権問題を扱ってきた報道センターの宮田輝美記者に聞きました。

### Q. なぜこの番組を制作しましたか？

宮田●滋賀県にある“茗荷村”とよばれる地域は以前取材でお世話になった共同体で、児童虐待問題が深刻化する中、「障がい者と暮らす村」が「里子と暮らす村」へと変わっていききました。代表の高城さんから「障がいのある里子が一番大変、施設でいじめられ、里親先をたらいまわしにされるケースもあり、最後の最後にこの村に来る。愛結美ちゃんがそうです。」と紹介されたのが取材するきっかけとなりました。

### Q. 番組で伝えたかった事は？

宮田●一番伝えたかったことは「血のつながりがなくても家族になれる」ということです。一方で、彼女と母の20年の歴史を振り返り、一度壊れた親子関係を取り戻すこともできることを彼女から教えてもらいました。先日彼女から電話がかかってきて「母への思いを書いた歌を作った」「あの番組を何度も見て母の思いが理解できた」と話してくれました。電話口で思わず涙が出ました。

### Q. 取材・放送をする上で人権について一番気をつけていることは？

宮田●“自分がその立場で聞かれたらどう思うか？”を常に



宮田輝美ディレクター



愛結美さんと宮田ディレクター

考えています。自分からダイレクトに質問はしないで、彼女と私が話していた様子を撮影した映像から言葉を紡ぎだしました。当初は彼女とは被写体と取材者という距離感でしたが、カメラが回っていないところで彼女とはその何倍も話をしました。彼女を他人と思えず、ある日「お母さんみたい」と言われてどきどきしました。彼女の気持ちをそのまま伝えたくて、あえて一人称でナレーションを書きました。

### Q. 記者の人権感覚は？

宮田●入社した当時は報道には人権担当がいて「記者はすべからず人権記者である」と学びました。プライバシーと人権の配慮に欠けた「メディアスクラム」の時代を経て、今は被害者の方の意向を尊重し、被害者の方から思いを聞く会もやっています。人権を振りかざすのではなく「人は人として尊重され、自分だったらやってほしくないことを人にしない」という普通感覚が大事」という価値観は若い記者も持っていると思います。

### Q. 普通感覚が大事と気づいた理由は？

宮田●入社して10年、報道記者として少し疲れた頃、子育てで10年報道現場を離れて共働きの主婦を経験しました。その間、映像制作をサポートする部署で仕事をしました。高校生らが1年かけて悩みながら映像制作する姿を見つめた経験は、普通感覚を取り戻す貴重なきっかけとなりました。

いろいろな“気づき”を大切にしたいと考えています。

## マイノリティに光を当てること——

## ドラマ『FINAL CUT』の放送を終えて

プロデューサー 豊福陽子



マスメディアだけでなく、今や誰もが発信者となり、誰かの人生を簡単に狂わせてしまえるほどの影響力を持つようになりました。貧困女子高生と題してテレビで特集された女の子がOA後にネットで誹謗中傷されたり、とある番組では“演出”という名のもとに、煽情的なテロップで事実が歪曲されたことが出演者の訴えにより判明。音楽家として世間を賑わせた佐村河内さんのドキュメンタリー映画『FAKE』の中では、父親が「信じていた人や友達がみんな去っていった」と話していました。日々、このような出来事に触れるうち、私たちは“ことの重大さ”に、実はピンと来ていないのではないか、と思うようになりました。

『FINAL CUT』は、そんな今ならではの“危うさ”を描きたいと思い、企画しました。

不幸なミスや悪意によって事実と異なる情報が広まり、人生を狂わされてしまう人々がいること。誰もがいつ加害者にも被害者にもなるかもしれないこと。だからこそ、溢れる情報の請け売りではなく、自分の目で、心で、物事をみつめることの大事さに思いを巡らせてもらいたい。「テレビがテレビを斬るという自虐」「ネット民に迎合したテレビ叩き」と言われるリスクもありましたが、医療や警察の暗部を描いてきた自分がメディアを描くとき、テレビ以外の媒体に逃げることはできないと思いました。情報番組や報道に携わる方々にヒヤリハット<sup>※</sup>経験などを聞き、ドラマとして面白く見てもらうための物語的要素との兼ね合いを模索しつつ、制作を進めました。

メディアにより犯人扱いされ亡くなった母をもつ主人公。彼の目的は、真犯人の逮捕でも加害者の社会的抹殺でもなく、メディアが誤りを認め、真相をきちんと報じることです。けれども、ドラマの目的はメディア批判ではありません。メディアも、血肉の通った“人”によって、その役割や意味が変えられるのだということが表現できればと思いました。

メディアの過熱、ネットの炎上……“祭りのあと”に違う真実が明らかになっても、人は見向きもしません。けれども、大勢が同じ方向を向いているとき、別の視点があることを提示したり、沈黙しているマイノリティに光を当てること、それこそまさにメディアならではのことができるのではないかと思います。最終回の主人公のセリフに「何かを伝えることで人の心を動かす、そういうのがメディアだろ？」というのがあります。メディアに携わる者としてこの原点に立ち戻ったときに、自ずと生まれてくる矜持。それこそが希望であり救いになるのではと考え、放送を終えました。

※ヒヤリハット＝重大な事故やミスに至らないものの、直結してもおかしな事柄



# 進化するリアルタイム字幕



字幕放送は聴覚障害者や高齢者などテレビの音声が聞こえにくくなった人や、音声が出せない場所でもテレビ番組を楽しみたい人のために、ドラマのセリフやナレーションなどの音声情報を文字にして画面に表示する放送です。携帯電話の着信音などの効果音も表示しています。関西テレビでは7時～24時の収録番組はほぼ字幕を付けて放送しています。生番組についてはニュース・情報・スポーツ中継を中心に「リアルタイム字幕(生字幕)」で対応しています。

2016年実績	対象番組に対する目標値	90.9%
	関西テレビの付与実績	98.5%
	総放送時間に対する目標値	42.7%
	関西テレビの付与実績	59.2%



生放送で表示される「字幕」



指示係が後方で文字をチェック

## リアルタイム字幕への思い

「災害時こそ、リアルタイム字幕が求められている」——2014年、編成部で字幕を担当していた毛利千保はそんな思いを上司に進言しました。これまでは生放送の字幕は外部に発注してきましたが、災害時、生放送のニュースでアナウンサーの言葉を瞬時に文字にして放送する「リアルタイム字幕」を実現するためには、文字を瞬時に入力するオペレーターと、その文字を放送するシステムが不可欠です。準備期間を経て2015年7月、関西で初めて内製(グループ会社の関西テレビソフトウェアが制作)によるリアルタイム字幕の体制を整え、運用にこぎつけました。2017年には本社マスタールームの横で字幕室が稼働し、より円滑にリアルタイム字幕の運用ができる環境が整いました。

現在は、平日夕方放送の『報道ランナー』と、野球やマラソンなどのスポーツ中継・選挙放送などでリアルタイム字幕を実施しています。

リアルタイム字幕チームは、専用の入力機器ではなく、普通のキーボードで3人の担当者が交代しながら入力を行っています。その後方で、指示係が入力画面を見ながら誤字があればチェックします。キャスターの喋りと字幕とのずれは10秒前後です。社内で働く聴覚障害者の女性の意見を聞きながら、更に見やすい字幕放送への改善につとめていきます。

## 第4章 番組を守る Protect programs

Chapter 4

## 分別をもった情報を

言わずもがなのことながら、テレビ番組には視聴率というものが常につきまとい、その数字に左右されて番組の評価をしてしまいがちです。このことは、局の人たちだけでなく一般においてもそうかも知れません。

いい番組である、と評価されても視聴率がともなわなければ評価が低いというのはなんとも解せないことです。視聴率はテレビ局にとってある種生命線ですが、過度に捉えるがあまり歪みが生じます。番組制作にたずさわるものは常に健康なかたちで視聴率と向きあうべきでしょう。いささか乱暴ながら、テレビ放送がはじまって以来、テレビにたずさわる人々はそういう矛盾の中をさまざまに切り抜けてつ、スポンサー、視聴者などの表情を前において闘ってこられたように思います。

しかしながら、我々は今、ITやAIが進化する変革の時代の只中において、視聴者の嗜好や関心はきわめて多様化しています。番組づくりもかつてはある程度の予測がつき、こうすればウケるといふ見通しの手掛かりがあったように思います。でも、今はそれが希薄になったのではないのでしょうか。

手掛かりがなくなった時代の番組づくりは難しくなります。だから制作者が自信作だと思ふ番組、自らの手応えを感じる番組をつくること以外ないように思います。つまりはドラマにしるバラエティにしる、視聴率というものを制作の現場の角において真摯に取り組む、原点を見

据える、ということでしょうか。

番組審議会でとりあげた番組からの印象だけで言えば、関西テレビには新しい時代に対応できるきざしのようなものを感じます。

例えば昨年秋のドラマ『明日の約束』。いじめや母子の問題といった思春期の子供を取り巻く問題点を描きました。あえて重いテーマを取り上げた姿勢がそのひとつ。『大阪環状線』の駅ごとにおきる日常の物語を描くドラマがパート3になったこと。タイトルは忘れましたが大阪の街を主役に35ミリフルサイズのカメラで撮影する当時としては新しい手法で捉えたドラマがありました。いずれもバイアスのかからない大阪を捉えたセンスがいい。

センス、といえば『セブンルール』のスタイリッシュな構成があります。コメンテーターと番組の流れがいいかたちでからみあって今の時代の流れの断面をとらえる新鮮さを感じました。そういうセンスがこれからの番組づくりに欠かせない、と思います。

ネット社会というこれまでありえなかった虚実おりませた他人の声、が拡散している時代です。

テレビ局の強味は、チームで番組という声を発信することです。それは自浄作用が働いた責任ある発信です。単なる情報を流すのではなく分別をもった情報を流すことができる、そのことがこれまで以上にこれからの時代には必要じゃないか、と思います。



関西テレビ番組審議会  
委員長 上村洋行

(うえむら ようこう= 司馬遼太郎記念館館長、司馬遼太郎記念財団理事長)

## 視聴者の利益を守るため 番組とCMをチェック

関西テレビの放送基準の前文には「当社は、世論を尊び、言論表現の自由と公正を守り、広告の真実に徹するとともに、つねに品位と番組の調和に留意し明るく健全な放送を通じて社会の信頼にこたえるものとする」と記されています。

番組やCMを審査する第一の目的は、番組の品質管理と広告の真実を検証し、視聴者の利益を守ることです。関西テレビで放送される番組やCMが、放送法や放送基準に照らして表現が社会通念を逸脱していないか、人権への配慮に欠けていないかを放送前にチェックし、場合によっては一部修正や中止を関係部署と協議します。これは最終的に放送の信頼性の確保に結びつき、表現の自由・放送の自由を守ることに繋がります。

2017年の事例では、審査部がドラマの行き過ぎたセリフ回しに

ついて台本段階で修正や削除を求めました。また、生放送番組では審査部員が、番組プロデューサー・ディレクターと共に立ち合い、視聴者から電話で指摘された間違いをその場で調査し、番組内で訂正を入れるなど、番組の質を落とさない伴走者としての役割を果たしました。

また公募で選ばれた視聴者から直接番組に意見を寄せてもらう「番組モニター制度」があります。モニターは報道・制作・スポーツ等、1か月2つの番組を見て感想や番組の批評を書面で提出します。これを冊子『モニターレポート』にまとめて発行し、社内で情報共有しています。『モニターレポート』は2017年度で累計2485号に達しました。月1回のモニター会議では、モニターの生の声をプロデューサーや制作者が聞き、番組制作に役立てています。

## 視聴者の声を 社内で共有

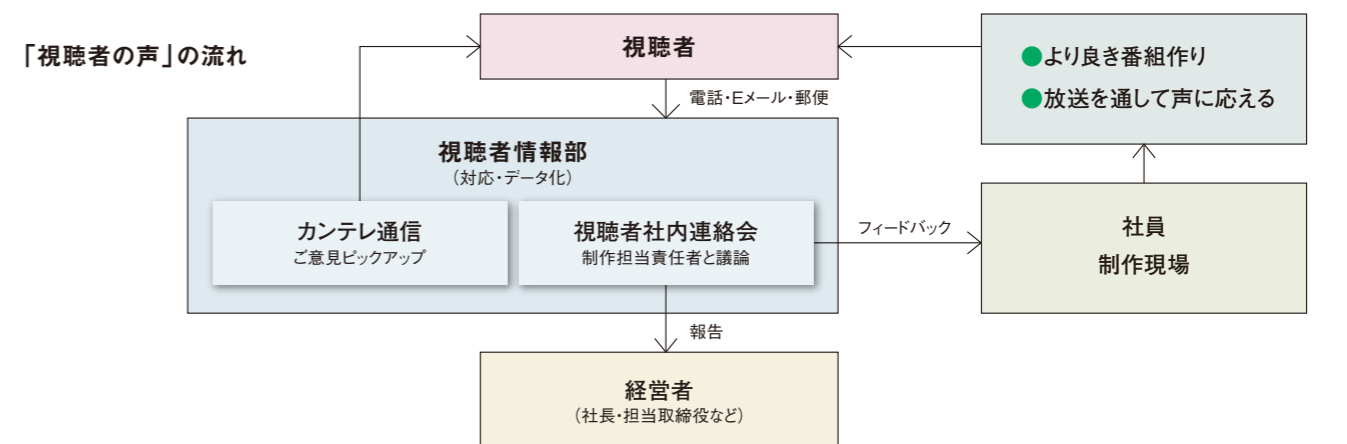
関西テレビでは、視聴者から電話やEメール、郵便等で寄せられた要望・抗議・苦情・質問等は貴重な情報と考え、視聴者情報部はそれらをもとに日報を作成し、番組制作の担当部署・経営者と情報共有しています。日報のダイジェスト版『フィードバック2017』を週単位で作成、また月報『エコマガジン』にもまとめ、どちらも全社員が閲覧可能となっています。

2017年度は、視聴者から合計約6万9千件(電話:4万5千件、Eメール:2万3千件、郵便:1千件)の声が寄せられました。

主な内訳は、質問2万4千件、要望1万9千件、感想8千件、抗議・苦情約1万件、情報提供2千件でした。

毎月第3・第4日曜日に放送の『カンテレ通信』の「ご意見ピックアップ」のコーナーで、視聴者の質問等について担当部署からの回答を紹介しています。

月に1度のペースで話し合う「視聴者対応社内連絡会」では、日報からピックアップした苦情や要望について、編成・制作・報道・スポーツといった番組制作にかかわる部署の担当者と、「何故、そんなことが起こったか」「今後どのように対応・改善していくか」等について議論しています。この会議は2017年度12回開催し、1年間で79件の案件を取扱いました。





# 自己検証番組 『カンテレ通信』



『カンテレ通信』は関西テレビが制作する番組を自ら検証・批評し、視聴者によりよい放送を届けるために、視聴者との対話を基本に構成している自己検証番組です。放送は原則毎月第3・第4日曜、朝5時30分から6時です。(2017年度は6時30分～7時)

視聴者から寄せられた声に対して担当部署が回答する「ご意見ピックアップ」のコーナーは、その重要な部分を占めています。

2017年度、『カンテレ通信』は24回放送しましたが、「ご意見ピックアップ」のコーナーは、総計54人の視聴者からの疑問・苦情・問い合わせ・激励などの声を取り上げ、1つ1つ担当部署が回答しました。

例えば、「自首と出頭の違いは？」といったニュースで使われる言葉の意味に対する質問には、報道センターが具体例を示しながら回答し、スタジオでもコメンテーターに意見を求めました。

「番組審議会」と「オンブズ・カンテレ委員会」という2つの第三者会議の内容もこの番組で報告しています。

また、企画コーナーでは、視聴者にもっとテレビを活用してもらうため、リモコンの操作方法や「データ放送」「文字放送」について、担当者が掘り下げた解説をしました。また、CSR活動やチャリティー活動についても報告しています。

関西テレビが視聴者にとってさらに身近な放送局となり信頼される局になるために、『カンテレ通信』は、これからも視聴者の声に耳を傾け、それに応える番組づくりを続けます。



『カンテレ通信』のスタジオ

## 感謝をこめて

この一年間、関西テレビのCSR活動にご理解とご協力をいただいたすべての皆様と、本報告書にご寄稿いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

お読みいただいで分かりますように、2017年度も関西テレビはCSR活動の3つの柱（「地域への貢献活動」「子どもたちの未来のために」「人権を守る」）の下、多岐にわたる分野において、多彩な活動に取り組みました。また同時にこれまでの活動内容を点検し、この4月から実施している社内見学など、時代環境に対応した、新たな活動への取り組みにも着手することができました。

関西テレビは開局から60年の節目を迎えようとしています。これからも楽しさや感動、そして正確な情報を伝える信頼される番組制作を土台にして、「カンテレにしかできない、カンテレらしい」といわれるCSR活動を目指してやっていきたいと思います。



CSR担当 専務取締役  
宮川慶一

## 会社概要

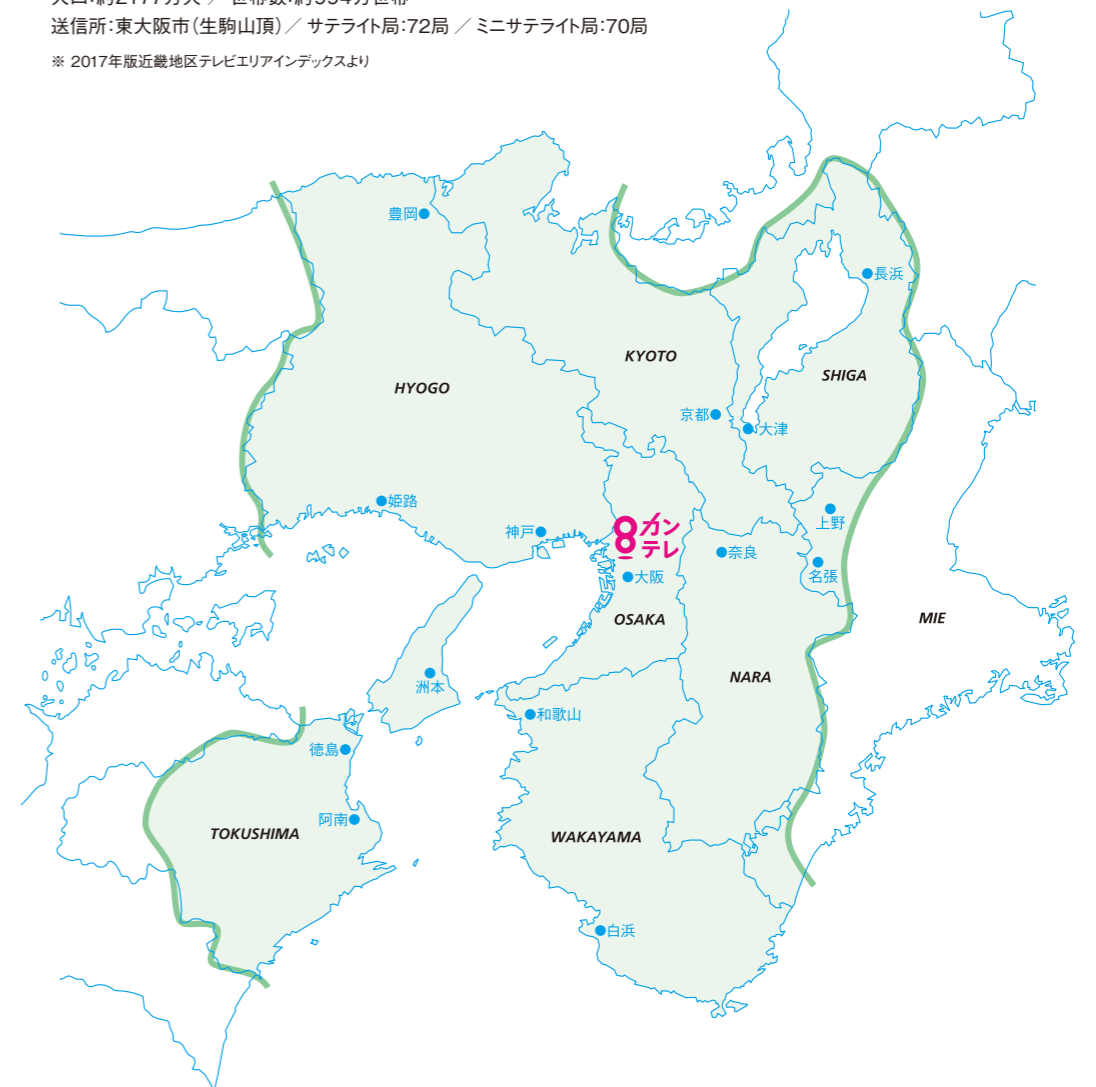
名称	関西テレビ放送株式会社
本社	大阪市北区扇町2丁目1番7号
代表者	代表取締役社長 福井澄郎
設立	昭和33年(1958年)2月1日
開局	昭和33年(1958年)11月22日
資本金	5億円
社員数	587名(平成29年4月1日現在)
事業所	支社:東京 東京都中央区銀座5丁目15番8号 時事通信ビル12階 支局:名古屋 / 海外支局:上海 海外特派員:パリ、ロサンゼルス

## 関係会社

株式会社関西テレビライフ
株式会社メディアブルボ
株式会社関西テレビハッツ
関西テレビソフトウェア株式会社
株式会社レモンスタジオ
株式会社ウエストワン
株式会社セントラルテレビジョン
株式会社ウエルネスライブ
公益財団法人関西テレビ青少年育成事業団

## カンテレ視聴可能エリア

人口:約2177万人\* / 世帯数:約994万世帯\*  
送信所:東大阪市(生駒山頂) / サテライト局:72局 / ミニサテライト局:70局  
※ 2017年版近畿地区テレビエリアインデックスより



## 持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals=SDGs)

SDGsとは2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル(普遍的)なものであり、日本も積極的に取り組んでいます。



- 目標 1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
- 目標 2 飢餓を終わらせ食糧安全保障および栄養改善を実現し持続可能な農業を促進する
- 目標 3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
- 目標 4 すべての人々への包括的かつ公平な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する
- 目標 5 ジェンダー平等を達成し、すべての女性および女子のエンパワーメントを行う
- 目標 6 すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
- 目標 7 すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な現代的エネルギーへのアクセスを確保する
- 目標 8 包括的かつ持続可能な経済成長、およびすべての人々の完全かつ生産的な雇用とディーセント・ワーク(適切な雇用)を促進する
- 目標 9 レジリエントなインフラ構築、包括的かつ持続可能な産業化の促進、およびイノベーションの拡大を図る
- 目標 10 各国内および各国間の不平等を是正する
- 目標 11 包括的で安全かつレジリエントで持続可能な都市および人間居住を実現する
- 目標 12 持続可能な生産消費形態を確保する
- 目標 13 気候変動およびその影響を軽減するための緊急対策を講じる\*
- 目標 14 持続可能な開発のために海洋資源を保全し、持続的に利用する
- 目標 15 陸域生態系の保護・回復・持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・防止および生物多様性の損失の阻止を促進する
- 目標 16 持続可能な開発のための平和で包括的な社会の促進、すべての人々への司法へのアクセス提供、およびあらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包括的な制度の構築を図る
- 目標 17 持続可能な開発のための実施手段の強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

## CSR REPORT 2018 関西テレビ放送 CSR報告書2018

編集・発行：関西テレビ放送株式会社 CSR推進局  
〒530-8408 大阪市北区扇町2丁目1番7号  
☎06-6314-8888(代表)

対象期間：2017年4月1日～2018年3月31日  
このレポートはホームページでも開示しています。  
[www.ktv.jp/ktv/outline/csr.html](http://www.ktv.jp/ktv/outline/csr.html)

2018年6月発行